

クラーク室内管弦楽団 第28回演奏会

“18, 19, 20 世紀の傑作, クリスマスの競演”

2012年12月26日(水) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

J. S. バッハ (1685-1750)

マタイ受難曲 BWV. 244 より 第65曲

アリア「わが心よ、おのれを潔めよ」

J. シベリウス (1865-1957)

バイオリン協奏曲ニ短調 Op. 47

バイオリン独奏：磐淵真里子

L. v. ベートーベン (1770-1827)

交響曲第5番ハ短調 Op. 67

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595 (工学研究院 下川部雅英)

プログラム・ノート

ある調査によると、現在世界のクラシック音楽の演奏会で取り上げられるレパートリーの約8割は、バッハ・モーツァルト・ベートーベンの作品で占められているそうです。これは作品の質もさることながら、作品の数の多さも関係しているようです。つまり、真の天才とは、質の高い作品を大量に生産した人と言えるのかもしれませんが。本日の演奏会も、3曲中2曲がバッハとベートーベンです。

バッハの「**マタイ受難曲**」は今日のバッハにとって大変意義深い作品と言えます。19世紀に入り、西洋クラシック音楽の世界では、バッハは忘れ去られた過去の作曲家でした。それを再発見し世間の認知度を復活させたのが若きメンデルスゾーンによるこの曲の演奏会でした。クリスマスの時期にはふさわしい音楽でしょう。本日はその中から**アリア「わが心よ、おのれを潔めよ Mache dich, mein Herze, rein」**をお届けします。本来はバスによるアリアですが、本日はファゴットが歌います。北大が誇るクラーク会館のパイプオルガン（ドイツ製）の素朴な音色と合わせて、お楽しみください。

ある日本人の指揮者が、初めて北海道を訪れた時に、「ああ、フィンランドみたいだ」と言ったそうです。すぐに周りの人から「なにをキザな」と言われたそうですが、北海道よりも先にフィンランドに行ったことがあったからこのような発言になったのです。特に冬のこの季節の雰囲気は大変似ているそうです。北海道でオーケストラ経験のある友人も、梅雨の本州にシベリウスは似合わないといっています。日本でシベリウスを演奏するなら北海道が一番なのかもしれません。本日の「**バイオリン協奏曲ニ短調**」は比較的少人数での演奏になりますが、当団の若手バイオリニスト磐淵真里子さんの若々しい音色が、シベリウスらしい透明感や清涼感を醸し出してくれます。

本日最後は、ベートーベンの**交響曲第5番**です。今年も世界中でさまざまな演奏が行われたであろう名曲中の名曲ですが、生で演奏をするたびに、新たな感動が呼び起こされる魅力は、人類の財産と言えるでしょう。当団にとりまして、第1回演奏会以来2回目の演奏となりますが、こじんまりとした編成で、都会的なスピード感のある演奏を目指したいと考えています。この曲は、貴族社会から市民社会へと大きな変動をとげつつあった19世紀初頭の喧騒としたヨーロッパの雰囲気を伝えていると考えられます。決して、重々しい音楽ではなかったはずですが、それまでの交響曲とは大きく趣を異にする第一楽章（メロディーらしからぬ信号のような動機が主題）は、当時の人々にとっては全く新しい前衛音楽であったと思われます。また、交響曲では歴史上初めてピッコロ、トロンボーン、コントラファゴットが使われたという点でも革命的な音楽だったのです。現在の日本や世界も決して明るい話題ばかりではありませんが、人間の社会であるからこそ起こる様々な困難に打ち勝とうとする人間の意志を、ベートーベンが見事に表現した音楽です。新しい年への希望を託して、みなさまにお届けしたいと思います。（奥 聡）